

地方偕行会からの視点

岡山県偕行会会長

角南 俊彦 陸自75

今から5年ほど前に首都圏から岡山県に戻ると直ぐに岡山県偕行会に入会。というのも陸上自衛隊退官直後、偕行社会員となり入会促進委員や総務委員をやっていたので自然の成り行きであった。

入会直後の平成31年末に、「角南理事は岡山県偕行会の将来施策を担当してくれ」と当時の永岑会長から指示された。偕行社でも将来の偕行社検討委員会のメンバーであったので、不思議な縁を感じながら取り組んだ。九州出身で初めて岡山県民になった身でもあり、岡山県の特性を学びつつ岡山県偕行会の現状を分析、問題点を明らかにし将来施策について1年間かけて検討。ちなみに当時、岡山県偕行会は永岑会長の強いリーダーシップのもと全会員が協力し県下の忠魂碑等を調査し、その状況をホームページに掲載していた（現在も継続）。

一人での作業であり表層的なもの

でしかないが提案した一部は次の通りである。

将来の問題点は、①会員数の減少（特に旧軍出身者は高齢であり今後急減）、②財務状況の悪化（①に伴う）、③将来の岡山県偕行会存在意義の3点である。旧軍出身者会員数について補足すると、令和元年25名が令和4年には10名以下に減少。

検討すべき将来施策については、上記問題点を解消するような施策を提案したが、ここでは将来の岡山県偕行会（元幹部自衛官のみになった場合）存在意義すなわち他の組織と異なる独自活動実施について敷衍する。岡山県内には陸自駐屯地（日本原、三軒屋）しか存在しない。岡山県隊友会会員の8〜9割は元陸自隊員。旧軍出身者も活動している偕行社に存在意義はあるが、それがなくなれば隊友会と変わりはないと思われる岡山県偕行会会員も存在する。

従って岡山県偕行会の存在意義のためには、隊友会が行っていない独自の活動も不可欠である。永岑前会長が取り組まれた県下忠魂碑等の調査は、そういう意味で大きな慧眼であった。他の施策（帝国陸軍郷土部隊研究等）については、未だ模索中

である。

7〜8年前、市ヶ谷の偕行社で、偕行社活動で受け継いでもらいたい芯は「英霊の慰霊である」と述べられたある旧軍出身者の言葉が耳から離れない。